

研究

日向泊「神の井」伝説と

龍溪の「浮城物語」

さとう たくみ

(会員 佐伯市池船町)

はじめに

大入島日向泊の神武東征の聖跡「神の井」は、明治の頃から佐伯の史蹟・名勝として、また観光の目玉として宣伝されてきた。往時の「神の井」の姿が明治四〇年の写真帳や昭和初期の絵はがきに残されている。また「神の井」を詠み込んだ旧制佐伯中学校の校歌は大正十三年に作詞されたものである。

さらに昭和四十五年に完成した佐伯文化会館大ホールの緞帳には、菅一郎画伯の「神の井」の絵が織り込まれ、現地を知らない市民も一度はこの絵を見ているはずで、昭和四九年発行の『佐伯市史』にも佐伯地方の「神話と



昭和初期の絵はがき「佐伯名所」神の井 神武天皇の聖跡

伝説」の筆頭に「神の井」伝説を紹介している。

昨年日向泊区長から「神の井」の碑文を解説したいとの要請があり、十月に二度ばかり拓本道具を持って現地を訪れた。昔は海浜にあった「神の井」も今は海岸道路に海を隔てられ当時の風情を欠いているが、裏山の天神社の遊歩道を含めて公園としてよく整備されている。

最近何度か訪れてはいるが石碑や碑文をまじまじと見たことはなかった。同じように観光やサイクリングで訪れる人達も「これが神の井か」と、湧き水を口に含んでは見るものの、周囲の石碑には目もくれず行き過ぎてしまう。数年前の台風で吹き飛ばされたとい、説明板もない現状である。

先ず神の井の脇には昭和六十三年に大分県知事平松守彦が認定し当時の佐々木博生市長が書いた「豊の国名水・神の井」の石碑が立っている。周囲に配置された石碑を古い順に掲げると

- ①大正六年秋「神井探尋詩碑」八代六郎海軍大将
- ②同 十月「神井之碑」大入島村長松本谷次郎(外)
- ③大正十三年八月「鈴木海軍大将聖跡探尋紀念」碑
- ④同 「皇祖東征舟泊紀念」碑 鈴木貫太郎書



大正六年、神の井の碑

- ⑤同 「神ノ井」鏡石 鈴木貫太郎書
 - ⑥昭和四年六月「寄附者芳名」碑 發起人長溝鳥藏
 - ⑦昭和十五年「紀元二千六百年紀念碑」寄附者芳名
- このうち②④⑥の裏面に神武東征・神の井伝説が刻まれている。

一、八代六郎海軍大将と神井探尋詩碑

八代六郎は明治・大正時代の海軍軍人である。万延元年(一六六〇)現在の愛知県犬山市に生まれ、愛知英語学校を経て海軍兵学校に進み明治十四年(一

八八二 九月卒業。日清戦争には巡洋艦高千穂分隊長として、日露戦争には装甲巡洋艦浅間艦長として参加した。

大正三年（一九一四）四月、第二次大隈内閣の海相に就任。翌年、第二艦隊佐世保鎮守府の各司令長官となり、七月七日海軍大将に進んだ。

〔日本近現代人名辞典〕抜粋

その八代六郎海軍大将が大正六年（一九一七）に第二艦隊を率いて佐伯湾に入り、九月十二日に大入島に上陸して日向泊の聖跡「神の井」を訪れた。これを迎えた大入島村長松本谷次郎は八代六郎海軍大将から紀念の書を



①八代海軍大将の神井探尋詩碑

賜ったので、自ら発起人となり海岸の石を選んで二基の記念碑を建立した。

一つは八代海軍大将の「神井探尋詩碑」として、一つは神武東征の由来を記した「神井之碑」である。

石碑① 神井探尋詩碑

【正面】

神州孰君臨

萬古仰天皇

皇風洽六合

明德侔太陽

【直訳】

神州たなか孰君臨す

萬古ばんこ天皇を仰ぐ

皇風は六合りくごうに洽あまなく

明德は太陽ひとに侔ひとし

城山拝書

じょうざん 城山（排号） 拝書

大正丁巳秋於日向泊

大正六年秋 日向泊にて

【語註】

〔神州〕 シンシユウ 昔中国の自称。神国Ⅱ日本？

〔孰〕 ジユク たれ（誰）。たれか。たれぞ。いずれか。

〔君臨〕 クンリン 君主として国民を治めること

〔萬古〕 バンコ 大昔。太古。永久。いつまでも。

〔洽〕 コウ あまねし。広くゆきわたる。

〔六合〕リクゴウ 天地と四方。天下中。世界中。

〔侷〕ボウ ひとしい。むさぼる。

〔城山〕ジョウザン 八代六郎の俳号

【裏面】

八代海軍大将大正六ノ年率第二艦隊入佐伯

湾九月十二日上陸探ノ聖蹟尋賜紀念之書矣

石碑②

【正面】

神井之碑

【裏面】

在昔神武乃帝の舟師を率いて東征し給ふ道ノ乃序大御船
をこの嶋根に寄せ給ひ征途の勞をノ犒はせ給ひしが嶋中
に水無きを患ひ給ひ御身ノづから岸邊に下り立たし皇弓
乃末もて巖乃下ノを突き給へば清き泉 忽ち湧然として
湧き出てノ頓に将士乃渴を醫せりとて語り傳ふる其の
奇ノしく尊さ大御蹟こそ即この神井なれ今も尚ノ
曠昔乃如く混々として流れて盡きざるこの清ノき泉の名
を永久に傳へんと石に鐫りつくる者ノは大入嶋邑

日向泊乃里人になん

大正六年十月 松本谷次郎

撰 竝 謹書

發起人

村 長 松本谷次郎

小学校訓導 高橋大作

伍長 荅名 組頭 四名

日向泊 青年 団

【語註】

〔在昔〕ザイセキ むかし。いにしえ。往昔。

〔帝〕テイ みかど。きみ。天子。

〔舟師〕シユウシ 舟に乗つて戦う軍隊。海軍。水軍。

〔湧然〕オウゼン 泉のさかんに湧き起こるさま。

〔頓〕トン とみに。にわかに。急に。

〔曠昔〕チュウセキ むかし。往昔。

〔混々〕コンコン 水のさかんに湧き出るさま。

〔醫〕イ いやす。病気をなおす。すくう。

〔鐫〕セン ほる。える。うがつ。彫りつける。

二、鈴木貫太郎海軍大将と聖跡探尋記念碑

鈴木貫太郎は慶応三年（一八六七）千葉県に生まれ、明治二〇年（一八八七）海軍兵学校を卒業し、さらに海軍大学をおえてドイツに駐在した。日露戦争には第二駆逐隊指令として従軍し負傷した。

大正三年（一九一四）海軍次官、さらに呉鎮守府や連合艦隊の司令長官を歴任した。この間大将にすすみ、大正十四年軍令部長となった。

昭和二〇年太平洋戦争最後の首相として内閣を組織し、降伏の衝にあたった。

〔世界大百科事典〕平凡社

鈴木海軍大将は大正六年十二月に練習艦隊を率いて佐伯湾に入り、大入島に上陸して聖跡「神の井」を訪れたのははじめ、十一年八月に再上陸、十三年八月十四日に三度来訪して探尋記念の書を残した。

今回は日向泊の長溝鳥蔵が発起人となり、大正十四年に大分県知事の許可を得、県内外の有志の援助を仰いで碑石全部の落成に至り、昭和四年六月三十日に除幕式を挙行した。



③鈴木海軍大将探尋記念碑

石碑③

【正面】 鈴木海軍大将

聖跡探尋記念

【側面】

鈴木海軍大将 大正六年十二月率練／習艦隊入佐伯湾
上陸聖跡探尋 十／一年八月再上陸 十三年八月十四
日賜探尋記念之書矣

【正面】 皇祖東征舟泊紀念

海軍大將鈴木貫太郎書

【裏面】

皇祖神武帝 日向を發し東征の途 畏くも戰舟此地に
寄せ給ふ時 井なきを患い帝身ずから浜辺下り立て井
を掘 湧出水を飲料にとらさせ給ふ 厥井今に神井と傳
ふ 又 皇舟を繫がせ給ふ二基の巨崑 截然として海岸
にあり 皇祖發生の靈蹟を有す 故に 地名を日向泊と
名づく

當地傳説人謹書／各發起人／長溝島藏

【語註】

〔皇祖〕 コウソ 天子の祖先。天子の始祖

〔東征〕 トウセイ 東方に征伐に行くこと。

〔舟泊〕 シュウハク ふなどまり。舟が停泊すること。

〔神武帝〕 ジンムテイ 神武天皇（人皇初代）

〔戰舟〕 センシュウ いくさふね。軍船。

〔皇舟〕 コウシュウ 天子の舟。

〔厥〕 ケツ ほる。ほりおこす。その。それ。

〔崑崑〕 ガン いわお。いわ。岩・巖

〔截然〕 セツゼン 断ち切るさま。はっきりするさま。

〔靈蹟〕 レイセキ 神仏に関わる古跡。奇跡のあった所。

三、神の井伝説と「浮城物語」

これらの碑文を拓本に採りながら、「神の井」伝説はいつ頃から生じたのか、二人の海軍大將がわざわざ探り尋ねた動機は何であったのか、疑問が湧いてきた。

おそらく日向泊の地名から生じた伝説であろう。江戸時代の国学者が「古事記・日本書紀」などを研究する中で、神武東征や景行西征の足跡を地名に求めようとしていた。米水津「宮ノ浦旧記」にはこんな話が記録されている。

あるとき村人が豊府（大分）に遊びに出かけたが、ある学匠から「昔、景行天皇が筑紫巡行のおり海部郡の宮浦に泊まった」という話を聞いて帰った。しかしそんな伝承を知る古老は誰一人いなかったが、いつのまにか村の天満社の縁起にしまった。天保十年（一八三九）の記録である。

このような地名説話や神社の縁起は津々浦々に数多く

ある。日向泊もその一例に過ぎなかつたであろう。

この「神の井」を世に知らしめたのは矢野龍溪の小説「浮城物語」だった。

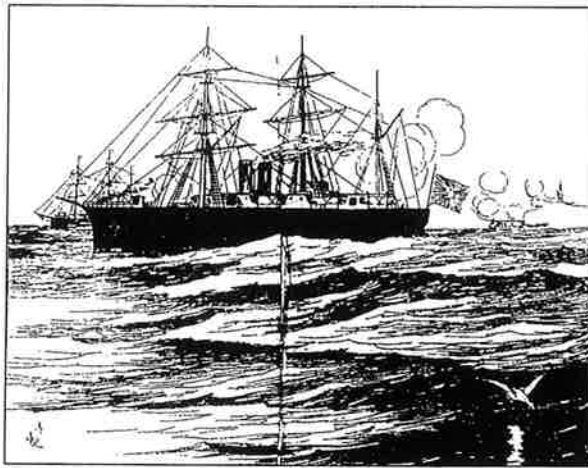
海洋冒険小説『浮城物語』

明治二十三年 矢野龍溪著

緒言

大分県豊後国海部郡、佐伯藩領に日向泊なる一漁村あり。むかし神武帝東征のとき、龍舟この地に泊せしを以て日向泊の名あり、海辺、砂積中の一小井、潮来れば海水の浸す所となり潮去れば輒ち見る、而してその水清冽塩気を帶ず、伝え云う帝、行宮を置くに当たり兵士をして穿たしむる所の者と、後人これを神とし、名づけて神井と云ふ。

藩政の時、この村に里正あり、その家神井の傍に在るを以て神井を姓とす、後改めて上井とす。この職を世襲す。伝て清右衛門なるものに至り早く死す、その孤清太郎幼より伯父某の家に養はる、年甫て十六七、(明治五年頃の由)笈を負て坂神の間に学遊すると称し郷を出づ、その後失踪して所在を知らざるもの幾んど十余



【あらすじ】主人公上井清太郎は仲間と海王丸に乗ってアフリカを目指すが、途中のボルネオ島で海賊に出会い、海賊の乗っていたイギリスの軍艦を奪い取って「浮城」と名づけた。バタビアではオランダ軍と戦いバタビアの独立を助け、インド洋へと向かう。

年、去歲明治二十二年外国郵便を以て伯父某の許に書を送致す。

某既に死して数年なり、その書伝へて社員の手に至る、これを読むに清太郎自家身上の経歴史にしてその事

絶快、人をして魂飛び、神遊ばしむ、宛然一個の好小説なり、乃ち繁を疋り冗を去りて更に修飾を加へ題して浮城物語と云ふ。(後略)

龍溪居士識

四、明治の先哲・矢野龍溪

【矢野龍溪】やのりゆうけい 本名矢野文雄

嘉永三年(一八五〇)佐伯藩士矢野光儀の長子として生れる。明治三年(一八七〇)父光儀が葛飾県知事に就任したので一家を挙げて東京へ移り、文雄は福沢諭吉の慶應義塾を卒業。明治十一年(一八七八)福沢の勧めで大



矢野龍溪

隈重信の下で大蔵省書記官に任用され、同十四年には太政官大書記官に栄進、しかし大隈の失脚で野に下り、「郵便報知新聞」の経営者となる。翌年「立憲改進黨」を結成して大隈を総理とした。

明治十六、七年に政治小説「経国美談」を発表たちまちベストセラーとなり、多額の印税を元手に欧米外遊に出かけ同十九年に帰朝した。

明治二十三年政界を引退して、海洋冒険小説「浮城物語」を発表。立憲改進黨も脱退して宮内省式部官となる。同三十年外務大臣に再任した大隈の要請で駐清特命全権公使に任じ、退官後は文筆に親しみ新聞や雑誌と関係し、特に「大阪毎日新聞」社の副社長も勤めた。

昭和六年六月没、多磨霊園に葬られる。八十二歳。

矢野文雄は、政治家であり、思想家であり、文学者であった。わが国の憲政史・政党史・文学史・新聞発達史・社会思想史には、龍溪矢野文雄の名は必ず出ており、その名はいつまでも残るであろう。

(佐伯市史) 抜粋、大分県先哲叢書「矢野龍溪」参照)

五、日本海軍と神武天皇

日向泊と同じ神武東征の伝説を持つ美々津のことを思い出し宗麟原へ向かう途中に立ち寄った。美々津大橋の下立磐神社の境内に石造の「日本海軍発祥之地」碑が築かれている。当地の碑文や説明板によって経過をたどるところである。

美々津の海岸に、神武天皇が東征の船をこしらえ指揮をするため座ったという石があった。後世その石を踏んだ者が往々にして病を発するので、われらの祖が衆議して石柵を築いて敬ってきた。しかし遠来の人には何のことか分からないので、地方の有志が碑を建てようと私に文を依頼してきた。天保年間、わが先人が江戸で師事した幕府の儒学者・古賀李暉先生が寄せられた詩があるのでこれを銘に代える。

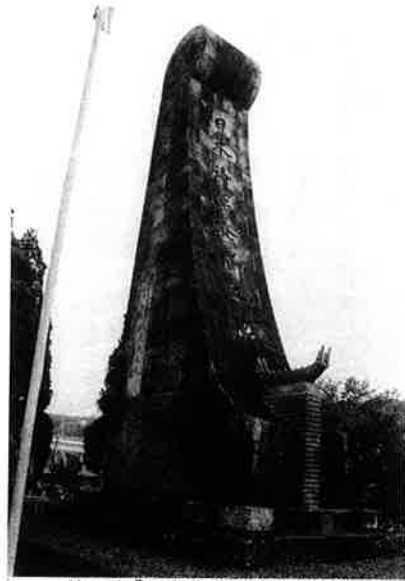
帝踞雲根耳水于 風光何啻畫可看

爾來閱歴三千歳 永尊皇基盤石安

明治四十二年四月 正七位 日高誠實 謹撰并書

右の石碑は現存せず拓本として残されている。

その後、昭和九年に「聖蹟美々津」の石碑が建てられ



美々津「日本海軍発祥之地」碑

た。これは神武天皇が日向を進発されて二千六百年を迎え、十月五日に宮崎神宮で大祭が奉修された際、宮崎県知事と全国協賛会が建立したものである。

さらに昭和十五年十一月「日本海軍発祥之地」碑が宮崎県奉祝会によって建立された。

これは日本海軍がこの地を「日本海軍発祥之地」と定めたので、紀元二千六百年記念事業の一環として施工された。碑文の文字は、時の内閣総理大臣海軍大将米内光政閣下の揮毫だという。

また同年、日本海軍協会・日本海洋少年団・大阪毎日

新聞社の主催により軍船「おきよ丸」を造船し、この美々津から大阪中ノ島まで神武東征の聖跡を巡行したという。畑野浦に寄港したおきよ丸の記念写真が残っている。畑野浦にも寄港したことであろう。

おわりに

神武東征の聖跡と日本海軍との関係を考えているところに、八月二十八日の大分合同新聞の読書欄「BOOKS サイト」に岩波書店「近代天皇制と古都」高木博志著の紹介記事があり、要約するとこうである。

神武天皇を祭る橿原神宮は明治二十三年に創始された。神武陵は近代天皇制が確立する過程で発見と修築が行われた。本書は、近代国家が「万世一系」の天皇像と悠久の「日本」を作り上げるために、どのようなにして新たな天皇制を創出したかを論じている。古都奈良では、橿原神宮と神武陵がとり上げられる。その広大な神苑の整備事業は、皇紀二五五〇（明治二十三年）年から二六〇〇（昭和十五年）年にわたり、官民挙げて推進した……。

評者・三浦佑之（千葉大教授）

奇しくも明治二十三年とは、矢野龍溪が政界を引退して『浮城物語』を刊行し、宮内省出仕の辞令を受けた年に当たる。

それから半世紀、佐伯には海軍航空隊や海軍防備隊が開隊し、大東亜戦争へと突入することになった。龍溪が『浮城物語』に描いた「ヨーロッパに支配されていたアジアの国々の独立を助ける」という日本人の崇高な理想は、皮肉にも侵略戦争への道をたどることになった。

【参考文献】

- 「矢野龍溪」大分県先哲叢書 平成十三年
- 「米水津村史」米水津村 平成二年
- 「写真集佐伯」軸丸勇 昭和五八年
- 「佐伯市史」佐伯市教育委員会 昭和四九年
- 「大佐伯」佐伯案内刊行会 昭和四年
- 「佐伯志」佐藤蔵太郎 大正三年
- 「皇太子殿下行啓南郡写真帳」 明治四〇年

◎碑文解読協力者 木許 博

神ノ井傳説

皇祖神武天皇日向ヲ發シ、御東征ノ途次、畏クモ戰船ヲ此地ニ寄セサセ給ヒシ時、井無キヲ憂ヒ、天皇親ヲ濱邊ニ下リ立チ、御弓ヲ以テ巖ヲ穿チ給ヒシニ忽チ清水湧出シ、之ヲ飲料ニ取ラセ給フ。清冽ノ靈泉昭々鏡ノ如シ。古來名ツケテ神ノ井ト稱シ亦、皇船ヲ繫カセ給ヒシニ基ノ巨巖ヲ玉石ト傳フ。截然トシテ海岸ニ立テリ。靈蹟儼トシテ存シ、其ノ地ヲ日向泊ト名ツク。

昭和四年十一月十日

舊豊後國佐伯藩主、贈從三位毛利伊勢守高政第十三世孫、貴族院議員正三位・勲三等・子爵・毛利高範

大正十四年大分縣知事ノ許可ヲ得テ縣有志ノ援助ヲ仰キ昭和四年碑石全部落成シ六月三十日除幕式ヲ舉行ス各發起人 長溝鳥藏

- 一金十円也佐伯町 小田部隣 同 百枝村 吉田徳藏
- 同 佐伯町 吉田藤平 同 浅海井 曾根角治
- 同 同仲町 一丁目會 同 同 曾根角藏
- 同 切畑村 近藤重藏 同 川原木村林 茂祐
- 同 同 榎波峯吉 同 佐伯町 葵井喜代志
- 同 部 落 同 大島村 野村諸平
- 同 大分市 山十製絲 同 芦刈□□
- 同 同 片倉製絲 同 赤口医院
- 同 中河原 廣瀬サワ 同
- 同 佐志生村板井金次郎